郷土はんのう

第8号

端正で力づよい　美しい塔である。
いつ　だれが　だれの　ために造立した
ものなのか　すべては茫洋とした時の流
れが　呑みこんでしまった。
中世の香りをたたえた塔は　いま　私
たちに郷土の歴史を語りかける。

宝篋印塔（沢寺　岩見光）

特集・2 ―― 加治地区

加治地区の歴史

西野長治

郷土加治の歴史の中から主なものを拾って紹介し、少し考察を加えてみよう。

一、縄文遺跡の宝庫

加治地区は縄文遺跡の多いことで知られる。泉が多く湧き、野山や川の幸に恵まれ住み易かったためであろう。縄文中期を中心に前期から後期にわたる遺跡が広く分布し、この中には飯能地方にめずらしいといわれる配石遺構が岩沢上野から、また古墳時代の住居跡が加納里地区から近年発見されている。信仰の対象物とされる大・小十数点の石棒が岩沢地区に存在すること、天神社の祠にご神体として大石棒が祀られているなど特色といえよう。

二、在地豪族、加治氏の居館はどこか？・・・

円照寺に板碑を残す丹党加治氏（家茂、泰家、宗泰、家貞などの系統？）の本領であったとされる郷土加治。見事な願成寺板碑群（市指定文化財）の造立者は誰か、居館跡（砦）と共に、不明である。同時代の大型板碑があるこれら願成寺、円照寺、宝蔵寺、智観寺を結ぶ圏内の存在がまずうかぶ。

次に、加治氏館を地名から考察してみると岩沢の小字名には前原、上野、後際、中内手（討手）、三ヶ谷戸があり、馬場（野田分）がある。これは居館を中心にして前、後、上、中等の地名がつけられたものと推定される。また、由緒ある古社、白髪白山神社（祭神清寧天皇、社領七石五斗）が近くに在ること。舟運の便がよく山や川が利用できること、後背に肥沃な耕地が開けている等、防備と生活条件を備えたなども見のがせないがこれからの研究に俟つほかはない。

三、古道、信仰のみち、交易のみち

加治地区には古道がよく残っている。鎌倉道、秩父みち、上州みち、江戸道、大山街道などがそれで道しるべが三ヶ所に残っている。また、これらの古道沿いには野仏も多い。

筏や舟運も通じ、堰が三ヶ所、渡船二ヶ所（川寺、岩沢）があって、昭和のはじめまで利用されていた。特産の西川材、直竹の石灰などもここを経て江戸へ運ばれている。

四、いまに伝わる双盤鉦（双盤念仏）

川寺大光寺と落合西光寺の二ヶ所には仏教芸能の双盤鉦が江戸中期から伝承されている。縁日のとき打ち鳴らす素朴で迫力ある独得な鉦と太鼓の響は、念仏と調和して人々を法悦境に誘い、心洗われるようである。県内に残るのは、他に西久保観音（宮寺）の一ヶ所だけで貴重である。（市指定無形文化財）

五、盛んだった六十六部信仰

江戸時代の六十六部（略して六部）信仰から造立された供養塔が加治地区には五基残り、その盛んだった様子が知られる。

落合奈良家からは先祖、七郎左ヱ門が安永八年回国巡礼に旅立ったとき身につけた笈や仏像、鉦などの法具、関所手形、回国略図、六部縁起等貴重な資料が近年発見され、心願成就後に奉納した供養塔、墓石、過去帳とも揃って六部信仰の解明に役立っている。

六、知られざる地場産業、亜炭鉱

飯能に鉱山があり、いまも採掘されていることはあまり知られていないようである。阿須運動公園の南に連なる加治丘陵一帯に埋蔵されており、約二百万年前に多摩川系の洪水によって原生林の針葉樹が埋没し、化石状になったものが亜炭である。戦時中は燃料用に使われたが、亜炭には推肥の成分が多いことから日豊鉱業㈱によって固型肥料として製品化、市販されており、化学肥料の増量用にも需要が多い地場産業である。また、亜炭層は県道『仏子の切通し』で露頭を間近に見ることができる。

―――＊―――＊―――

郷土加治についてさらに説明を加えたいが、紙数がないので項目だけの紹介にとどめたい。

㋑ 八王子車人形創始者初代西川古柳の碑と生家。

㋺ 鎌倉詫間仏師の作といわれる大光寺虚空蔵菩薩像、見光寺地蔵菩薩像（共に法衣垂下像）。

㋩ 阿須要害山、高麗経澄、観応の古戦場と戦乱にまつわる地名とその伝承。

㋥ 武州矢颪窯跡

㋭ いまも続く岩沢の庚申信仰

●加治

浅見徳男

加治氏、加治郷、加治領、加治氏など、飯能地方の歴史を考える上で、「加治」という文字は大変重要な位置を占めている。

しかし、これが、どのような範囲を示し、いつの時代に誰が領していたのか、どのような変遷があったのか、などのことを考えはじめると、途端に心もとなくなってしまう。

古代から中世においては、地名と氏名とは密接な関係にあり『源平盛衰記』などでは熊谷次郎直実、畠山庄司重忠など、いずれも本貫地名の後に「の」の字を入れて表記している。これは、どこそこの誰ということを示しているのであるが、後世この「の」の字が除かれて、それが姓氏になっていった。管見では、加治氏についてその表記例を見ないが、おそらく同様に加治の住人誰某ということであったのであろう。

さて、加治という地名は現在でも使われているが、歴史上このように呼ばれるようになった時期や範囲はどのようであったのであろうか。残念ながら確としたところはわかっていない。ただ、『倭名類聚鈔』には、高麗郡中に「高麗郷」と「上総郷」の二郷があったことが記されている。

この高麗郷は、現在日高町域を中心とした区域、上総郷が飯能市域を中心とした区域と考えられており、上総が加治と音が変化したと考えられている。多分、その考えは正鵠を射ているように思うが、その範囲を確認することは、はなはだ困難である。

そこで、『新編武蔵風土記稿』に書かれている加治郷・加治庄・加治領などのうち、もっとも上総の範囲を示していると思われる「加治領」について記してみよう。これによると高麗郡加治領に四十七カ村、秩父郡加治領に二カ村が記されている。それを拾い上げると次のようである。

【高麗郡】

唐竹、赤沢、原市場、上直竹、下直竹、苅生、小岩井、小瀬戸、大河原、上畑、下畑、永田、飯能、久下分、矢颪、前ヶ貫、岩淵、落合、阿須、佛子、上岩沢、下岩沢、笠縫、真能寺、中山、中居、青木、双柳、野田、篠井、根岸、上広瀬、下広瀬、芦苅場、上川崎、下川崎、平松、小久保、下加治、宮沢、馬引沢、田木、上大谷沢、下大谷沢、中沢、臑折、臑折新田、以上四十七カ村

【秩父郡】

上名栗、下名栗、以上二カ村

このように、高麗領と呼ばれた地域は、およそ入間川沿いで中山丘陵の南側の村々ということがいえよう。なお、同様の見方をしていくと、風土記稿の高麗郷二十ヵ村は、高麗川沿いの中山丘陵北側の村々ということになる。もっとも、これは百六十年ほど前にはこのように呼ばれていたということで、時代によって領域が変化したであろうし、風土記稿の中でさえ庄・郷・領などの書き方に一定の法則性が見られないので、支配領域あるいは中世以前の加治領域を示したものではなく、単に風土記稿の編さん者が村々から聞き書きをしたそのままを記したものかも知れない。

しかし、風土記稿を離れて、多くの古文書類を見ていくと、この風土記稿の内容がいかに精緻をきわめ、丹念に調査をして編さんされたものであるかがわかり、内容の信憑性も増してくる。このように見てくると、千年以上も前の上総と百六十年前の加治領とは、多少の差違があるにしても重なってくるのではないかと考えられ、差程の相違はないと思われるのである。

この領域については、飯能の歴史を考える上でもっとも基本的なことであるとともに、重要な視点ともなるものである。わずかな紙幅の中で、あえて考えをめぐらしてみた由縁である。

元加治　円照寺

●青石塔婆の語る加治氏

岡野達雄

(一)

数年前に飯能市の板碑調査報告書を編集中、その表紙の色が話題に上った。他の市町村等の報告書を見る限り、一般に板碑の石質である緑泥片岩から発して、緑色や型通りのそれが多いのである。そこで当市は少々ウイットを働かせて、青石塔婆の名称を生かした青色を基調とする表紙に落ち着いた。では、あの青緑色に輝く板碑の「青」とは何であろうか。何か色彩の持つ特殊な意味があるのだろうか考えてみると……。

ある説によれば、古代日本語では固有の色名にはアカ・クロ・シロ・アオの四種だけで、それは明・暗・顕・漠を原義とするという。「アオ(漠)」はシロの対で、本来は灰色がかった白色を指したらしいが、やがてこの青・白が王権や祭祇を象徴する色になったといわれている。また、蘇軾(そしょく)の詩に「是処青山可埋骨」とあるように青山＝墳墓の地を意味するなど、伝承的世界での青は、霊界と結びついた色として用いられていたらしい。

(二)

ここに発生期の板碑である十三世紀中頃の丹治泰家銘の板碑が三枚現存している。史料的裏付けが出来る。歴史上の人物名を刻む板碑は珍しく、加治氏系図をみる限り、泰家は家季の四代目の子孫である。

(1)建長八年丙辰二月廿三日
左衛門尉丹治泰家敬白
(山口・来迎寺蔵)

(2)康元元年丙辰十一月廿三日
比丘尼妙證□為成等正覚造立之
孝子左衛門尉丹治泰家敬白
(元加治・円照寺蔵)

(3)右志者為丹治泰家
成等正覚
文永七年庚午正月十三日
丹治宗泰孝子
丹治氏敬白
(元加治・円照寺蔵)

(1)・(2)は、年号の建長八年(一二五六)が十月五日に康元に改元されているので、同年代の造立。(2)は泰家の母、比丘尼妙證の供養塔であり、(3)は泰家を丹治一族が追善供養したものである。

同様に、中山智観寺の仁治二年～三年(一二四一～四二)の板碑が加治家季の子による父母の追善供養のために造立したと考えられるなど、丹党加治氏の祭祇における追善供養、葬送の伝統的信仰には根強いものが見られるのである。

(三)

では次に、加治氏の地位を支えた社会的条件を考えてみるなら、それは鎌倉期以降の加治氏の発展分出と所領経営の成功であろう。この頃まで加治氏は幕府の御家人であった。ところが弘安八年(一二八五)の「霜月騒動」によって、加治氏は安達氏に属していたために没落してしまった。

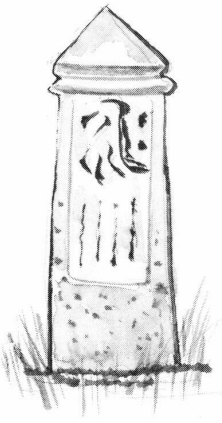
その後、加治一族の勢力を伸長させたのは、北条氏得宗家の御内人になったことである。幕府は蒙古襲来を契機に、非御家人に対する軍事的指揮権を獲得したり、また諸国の寺社修理、造営や一国平均役賦課などを持つなど、その力を全国的なものとしていった時期である。こうした得宗専制下での加治氏の被官ぶりを円照寺の板碑にみると、嘉元三年(一三〇五)の板碑があげられる。これは加治氏が北条宗方の乱に連座して処刑された光家、父家景、弟助家などを追善した供養碑である。そしてもう一枚の元弘三年(一三三三)五月二二日のものは、鎌倉幕府軍が敗れ、高時幷一門以下が相模東勝寺において自害したその日を指し、加治氏もこの中に加わっていたと思われるのである。

「嗚呼此の日如何なる日ぞや、元弘三年五月廿二日と申すに、平家九代の繁昌一時に滅亡して、源氏多年の蟄懐を開くことを得たり。」と太平記は記している。

また、加治氏と鎌倉との往還は、この元弘三年の禅宗板碑(無学祖元の「臨剣頌」の詩偈を刻む)にみるような禅宗の地方伝播をもたらしたと思われる。ただ、ここで当時の武士たちが異国趣味あふれた純粋禅を充分に理解し、摂取しえたかはいささか疑問である。禅宗を理解して参禅し得たのは、一部上級武士たちであり、その武士も権力を掌握するに伴って、徐々に公家・貴族化していった様子は、源氏三代の将軍や北条氏をみても明らかである。南北時以降の禅は、むしろ武士には学問、教養として、農民には、土着信仰や密教と結びついた現世利益をもたらすものとして深く根付いていったようである。

(四)

そして、加治氏と隣接して金子氏も、加治丘陵を基盤とした有力武士団であったが、いつか本領を離れていった。金子氏の館跡、金子一族の宝筐印塔とされるものや、仏子の高正寺・加治の願成寺、正願寺の同時代の板碑がその盛衰を物語っている。



●信仰の旅

―六十六部と回国供養塔―

坂口和子

●奈良家の遺品

加治歴史散歩の折、落合の奈良多佐雄家に伝わる六十六部行者の遺品を拝見した。

ご先祖に当る奈良七郎左衛門さんが使用された笈は、庭の小堂のなかに大切に保存されていた。笈の中央には小さな大日如来木像が祀られ、細かい仏具類なども引出しにしまわれている。二〇〇年も昔のことになるが、ご先祖の遺品を大事に受け継がれてきたのだろう。また当時の関所通行手形、回國略図などが遺されているのも大変珍らしいことだった。

その上、七郎左衛門さんの回国業を裏付けるたしかな資料として、落合の西光寺に「六部供養塔」が同氏によって寛政八年（一七九六）に造立されており、墓地には七郎左衛門さんの墓（白峯常顕信士、文化三年没＝一八〇六）もあるので、関連あるこれらの遺物は六十六部行者を知る上の貴重な資料といえるだろう。五年ほど前、岩沢の西野長治氏によって発掘され、脚光をあびたものである。

●六十六部とはなにか。

数ある石塔のなかに「回国塔」とよばれる経典供養塔がある。全国的に分布しているのでご存知の方も多いだろう。塔型は一定化していないので、自然石、角塔、笠付塔、浮彫りなど多様だ。銘文も「回国供養」「奉納大乗妙典六十六部日本回国」「回国六十六部」などの字句が彫られている。奈良七郎左衛門造立の供養塔は、正面に「六部供養塔」と書かれているが、六部とは六十六部のことで略して六部ともいう。

これらは大乗妙典と呼ばれる法華経を、近世まで六十六ヶ国に分れていた日本各地の霊場に（諸国一の宮とする説もあり、定説はない）保存する目的によって、手写した経を六十六部作り、それを一部ずつ霊場に納める目的で、国々を廻ったり、廻っていることを銘文にした石塔である。この回国の行脚僧を六十六部、略して六部と呼び、その始まりは室町時代であるといわれる。

江戸時代には僧侶ばかりではなく、一般庶民も六部に出たというから、僧俗混入しての回国であったらしい。

千葉県東葛飾郡沼南町
〔正徳４年（1714）〕

●回国塔の造立

手写した六十六巻の経典を背負って歩いて、一部ずつ納めるのに要した日数は、数年から十年ほどもかかったようだ。交通の発達しない当時のことを考えると、相当の信仰心がなければ成し遂げられないことだったろう。

業半ばにして病に倒れることも、時には山賊などに襲われることもあったようで、幸いにして回国を成就した時の喜びはいかばかりであったろう。

それを記念する思いが、回国成就塔の造立につながり、また回国行者が旅の途中で倒れた場合は、六十六部供養塔ともなったのである。当時は難行とされる回国行者に宿を貸し、世話をすることも大きな功徳を伴う供養とされていて、世話した人数が一定数に達した際に「回国千人宿供養塔」を造立したものである。回国成就塔は普通回国行者何某と個人名が記されており、行者の供養塔には面倒をみた土地とか連れの名が記してある。

行者奈良七郎左衛門さんの通行手形の発行日付が安永八年（一七七九）で、西光寺に建てられた六部供養塔が寛政八年（一七九六）であるから、その間一七年。旅に出たままの一七年間か、あるいは一七年の間に心願を成就したのか、おそらく後者ではなかろうか。銘文に「回国扶桑参仏社□大乗妙法納経来□新彫宝塔成心願□群生同登蓮華台」とある。

●往来一札の事

回国行者が諸国行脚をするには関所通行手形が必要で、それには、もし途中で死せる場合は、土地の定法によって葬り、その連絡は事後に幸便、つまり、ついでに知らせればよいと記すのが書式であったといわれる。

奈良家に遺された「往来一札の事」は西光寺の印と名主の印を押し、宛名は関所役人衆中、村々御役人中で内容は、

「七郎左衛門は私の寺の檀家で、この度諸国順礼にでかける者ですからどこの関所でも通行させてください。もし夕方になりましたらその村で宿をとるようお願いします。万一この者が病死したらお慈悲にその村で葬ってもらい、こちらへの連絡はしなくてもよろしゅうございます。」

（新井清寿氏解説）

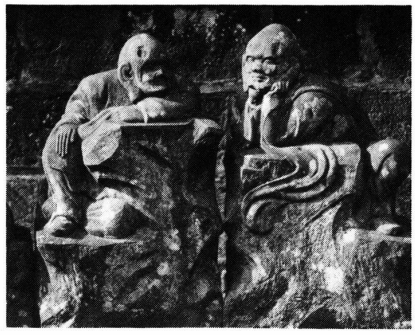
となっている。これを見ても六部に出るということは、出る方、送る方ともに強い信仰の裏付けなくしては成し得なかったことだろう。

最近の石造物悉皆調査によって、六十六部の回国供養塔が各地に遺っていることが明らかにされた。加治地区では五基ほど調査されている。かつての「信仰の旅」を探ることで、庶民の信仰意識も浮彫りにされるのではないだろうか。

（イラストは私の見た石塔で、六十六部の姿が忠実に描かれていると思われるもの。）

川越歴史散歩

吉田 茂



八月二十六日、小泉功先生の御案内のもとに、河越館跡と小江戸川越を訪ねる研修会が、会員四十五名参加の下に開催された。

最初の見学地は、川越市の中心部より西方約三キロメートル、入間川左岸に位置する国指定史跡「河越館跡」である。この地を川越の旧地とする説は古くからあったが、確かなものではなかった。河越氏の本拠であったことを確認するに到ったのは、昭和四十六年から始った九次にわたる発掘調査を経た後のことであるという。しかし、未だ領域確定の段階で、主要部分の解明には、今後の発掘調査をまたなければならない状況である。

館の規模は方二町、四周に土塁と二重の堀をめぐらしていた。現存しているのは西の土塁百九十八メートルであるが、発掘調査によって、さらに二十メートル南まで伸びていたことが確認され、中世の豪族の館としては最大級のものであることがわかった。これは『新編武蔵風土記』（文化文政期）所載の常楽寺絵図とほぼ一致するという。河越氏の持仏堂は現在常楽寺となって残され、寺の正門は往時の大手と推定されているが、館跡の西南部は市道によって一部分断され、原形を止めていない。

常楽寺山門下で小泉先生の講義を拝聴した後、現存する唯一の遺構西側土塁に沿って北に進む。高さ四メートル、底面の幅七メートルと聞いたが、雑木や夏草に覆われていて、全容を偲ぶには程遠い感じである。西北端は搦手。この付近も道路によって寸断されている。堀と土塁とによって、侵入者の直進を阻む構造が、僅かに想像されるだけである。

すでに消滅した北土塁の跡をたどって上戸小学校に着く。ここには、先生方の努力で「河越館」復元模型が完成し、展示されている。「点の調査結果をもとに面とし全体を構想するのは大変難しい作業だった」という担当者の話に、一同、心からうなずいていた。校庭の一隅の排水工事現場では、この館を特色づける運河の遺構を覗き見ることも出来た。入間川から引き込んだ物資輸送用のもので、それを証拠立てる倉庫跡や、舟を曳く通路も確認されたという。

ここに館を営んだ河越氏は、関東八平氏の一つ秩父氏が出た重隆を祖とし、三代重頼は源頼朝の信任が厚く、夫人比企尼は頼朝の長子頼家の乳母となり、またその女は義経の正室となっている。しかし、義経討滅の累に連なり、長男と共に誅殺された。その後、次男重時の代には執権北条氏に重用され、武蔵国留守所総検校職となっている。したがって、この館は武蔵国の政庁を兼ねた要地であった。その後、南北朝の動乱期になって、平一揆の敗亡の際、河越氏は滅び、上杉氏の川越城に中心が移り、河越館二百年の歴史は時の彼方に消え去ったのである。

次は養寿院に河越重頼の供養塔を訪ねる。重頼の曽孫経重開基（一二四三年）と伝えられる養寿院には、文応元年銘の銅鐘（国指定重文）もあるが、今回は見学出来なかった。重頼の供養塔は、室町後期の五輪塔で、おそらく河越氏発祥の故地上戸を離れるにあたって、祖先を供養するために建てたものと考えられるという。

養寿院の傍には菓子屋横丁、門前を真直に進めば蔵造りの残る一番街である。昼食は蔵店の奥の間での〝せいろ蔵むし〟、小江戸情緒を味わいながらの歓談。

午後の見学は、服部資料館から時の鐘、さらに蔵造資料館へと、九斉市で賑った一帯を歩く。黒漆喰仕上げの重厚そのものの蔵店を改めて見直し、町並保存の必要性を痛感した。

高札場のあった札の辻から、西大手、氷川神社を経て本丸御殿に着く。嘉永元年、松平斉典造営の本丸の一部が現存しているに過ぎないが、玄関式台、大広間には、十七万石の格式をしのばせるものがあった。

最後の見学地は喜多院。寛永十五年の大火にも焼け残った山門は、本瓦葺切妻造りの堂々とした四脚門である。喜多院の主な建物は、寛永大火で焼失したため、三代将軍家光の命で、江戸城紅葉山の別殿を移築したものという。客殿、書院、庫裡がそれである。六曲一双の『職人尽絵』に見入り、江戸時代初期の城下町の生活に興をそそられる。〝家光誕生の間〟、〝春日局化粧の間〟と巡り〝うぐいす張〟の廊下を渡って本堂へ。元三大師、慈眼大師を中央に、左右の不動明王は護摩の煙で煤け森厳そのものである。

大師堂前で記念撮影の後、五百羅漢見学。五百四十体の群像の多彩な姿を、顔を近寄せながら見てまわる。寄進者の無言の願い、石工達の祈りの心がまつわりついてくるような錯覚にとらわれた。中に一体、「飯能町」と刻まれたものが目に焼き付いている。

川越市では近く博物館建設に着工するという。豊富な文化遺産が綜合的に研修出来る日が待ち遠しい。

●古文書が語る・・・

新井清寿

江戸時代の貢税（税）は、初期には四公六民と言って四割が貢税であったが、幕府の財政の逼迫に伴い貢租を増す者も出て、一揆の原因となった。飯能付近でも貢租減免の嘆願書が出されたり、また一揆をおこしたこともあるが、その甲斐なく貢租は農民にとってはまさに酷税であって、働けど働けど楽にならぬ苛立ちをなんらかの形で表わす者もいた。その例として酒に溺れた男の古文書が残っている。

「酒狂につき誓約一札
差上申一札之事」

一、私儀は常々大酒で、近所や五人組の方々へ度々ご厄介をおかけしていて、その上この度は酒乱のため、種々母の心にまで背いたので、組合の方々が心配してご意見をしてくださったのに、一向聞き入れないで、かえって悪口を申し上げたので、やむを得ず組頭様が名主様に申し上げたので、そのままにしておくわけにいかないとて、組合あずけにして、その罪を村中に知らせるとの仰せつけで、私も今更のように自分の悪かったことを思い知らされたので、組合の方々におわびをいたしましたところお聞きずみくだされたので、今度はきっと禁酒し、不埒なことは絶対にしないで、百姓仕事にはげみ、母親にも孝養をつくします。若今後不埒なことがありましたら、どのようなおとりあつかいをされてもお恨みいたしません。

後々のため加印してお約束いたします。

寛政八年辰七月

当人　氏　名　㊞
五人組氏　名　㊞
同　氏　名　㊞
同　氏　名　㊞
同　氏　名　㊞
組頭
氏　名　殿

こんな古文書を読んでいると、働いても働いても楽にならない当時の農民が、その苦悩を訴えるすべもなく、ついには酒に溺れ、一番弱い母親にまであたりちらす哀れさを、語りかけてくれるように思えてならない。

この組合あずけというのは、言わば村八分のようなもので、村人から絶交されるわけで、その村では生活できなくなることで、こんなきびしい仕置を命ずる村役人たちも、苦しいのはおまえだけでない、みんな苦しんでいるのだから、お互生きるためには堪え忍ぶよりしかたがないのだと諭しているのだと、語りかけているような気がしてくる。

あるいは、娘を十五両で売ったという証文もある。これなど最も残酷な例で、親子の愛情はまた格別である。その愛娘を売らなければならない心情は、とても筆や言葉では表すことはできない。あわれなできごとで、読む私たちに世の非情をうったえているようで、肺腑をえぐられる思いがする。

童女　さだの涙

東京府小石川区小石川
同心町五番地
士族川井久道三女　さだ
（明治五年八月出生）

一金拾圓也
右者今般我等三女さだ義得心之上親戚相談仕貴殿方江製糸習熟ニ差出シ候処実正也但シ年季之義者當明治十三年従来ル明治拾九年七月迄満七ヶ年……

……右　川井久道　㊞
下谷区下谷金杉村
平民
保証人　福井竹次郎　㊞
埼玉縣下武蔵国高麗郡飯能駅
暘業會社第三製糸所
大河原章平　殿

士族川井久道三女、と書かれているように、世の中の変動は八才の童女にまで、働くことを要求した。

年季は、年齢によって長短があるが、七年、五年、三年で、おおよそ年季間十五円位の割合で取引され、通常年季証文を入れると同時に、三分の一、年季半ばで三分の一、年季明けに三分の一を渡した実際には、周旋屋の手数料、旅費等引かれるので、両親の手元には、いくらも残らなかった。このさだは、七年を十円で過ごすわけだが、この時八才の童女であった。

（飯能市史　産業編より）

●随筆

かよい

井上峰次

私事になるが、わたしの一族は川越との縁がまことに深い。いまも川越には親族の多くが住まい、折ふし往き来している。わたしには川越という呼び名が、柔らかく肌にふれてくるような声韻にひびくのも、そのためかもしれない。

郷土史研究会の川越歴史散歩は灼熱の八月だったが、わたしは決められたときからこの催しを待ち望んでいた。講師兼案内役をねがった小泉功先生の精力的で懇切ていねいな説明が、私達に川越の印象をより鮮明にさせた。

その中でわたしは河越館跡の発掘調査により発見された、運河と堀跡についてとくに惹かれるものがあった。〝江戸と小江戸を結んで三百年〟と言われる江戸期以降の新河岸川舟運は、斉藤貞夫氏の研究で知られているが、この堀跡はそれをさかのぼる鎌倉期（十二世紀）にすでに利用されていたという。

都市の発達には、交通・交易が大きな因子となっているようだが、川越の場合も例外ではないと思う。小江戸と呼ばれる繁盛ぶりは、川越とその周辺の豊かな物産にあることも確かだろうが、交易によることも見逃せない。それも量と運賃の面で、舟運にたよるのが最も利便と言えよう。その舟運の先駆となったのが、河越館跡の堀と運河ではなかったのか。つづめて言えば川越の街づくりに大きく貢献したのは、中世から近代に至る舟運であったように思える。それはひとり川越を盛んにしたばかりでなく、飯能を含めたその周辺部まで影響を及ぼしたとき く。

飯能の交易（物流か）と言えば必ず筏が出てくる。主産物である木材の搬送手段として筏が主役であったことに変りはないが、水量の少ない飯能の川では、水涸れの時期の流筏はできなかった。それを補ったのが川越の舟運と言えそうだ。川越の河岸場関係の資料には、飯能近辺との舟荷の受渡しがあるときいたので、飯能市史編さん室にもその資料がどれほどあるか調べてもらった。

いま収集できている川越関係の資料は二十四点ほど。石灰運上・出入に舟運の重なったものが多いようだが、期待していた木材については見当らなかった。

川越歴史散歩で河越館跡の運河と堀跡の説明を受けたなかで、舟をつないだと思われる、もやい柱の跡が残っていたことをうかがった。その折、わたしは舟積みの光景を連想し、ふと我家にあった「かよい」のことを思い出した。もう二十数年前、ある郷土史の刊行にかかわった際に、筏の記録を整理していたらその中にまじっていた〝積附通（つみつけかよい）〟のことを――。

これは文久四年（一八六四）に川越新河岸横田屋から出されたもので、六分三寸（小幅板か）の製材品を深川へ送った船賃などが記されている。日付けは、十一月・十二月・二月など筏の流せない時期で、船積みし易いよう、また河岸場まで搬送し易いよう製材加工したものを送っている。なお、この「かよい」は市史資料編を担当なさった新井清寿先生が、同産業編に資料としてその一部を載せられた。

川越の舟運は河越館跡の発掘とこれからの調査研究によって、新たなページが加わるかもしれない。しかし、現在明らかにされているのは、寛永十五年（一六三八）仙波の東照宮が焼失し、その再建資材を江戸から新河岸川の舟運によって運んだのが、はじまりとされている。それから昭和の初頭まで三百年の舟路の歴史を刻み、河岸の出舟・入舟のにぎわいと、近郷との物流の記録を今に伝えているが、飯能と舟運とのかかわりはごく僅かな資料で、かいまみる外はない。まして、西川材の舟運利用については、わたしのもつ「積附通」が一点見当るだけで手探りの状態。それなのに、川越新河岸に伝わる舟荷物の「定」（運賃表）には、木材・板貫・杉皮などが明記され、かつての河岸には西川材の丸太がゴロゴロしていた（斉藤氏「川越舟運」）というから、かなりの木材が扱われていたのがうかがえる。

川越歴史散歩から帰って、日ならずわたしはこの「かよい」を見かえし、新たな親近感をもった。それは縁の深い川越との交りがこの頃から続いていたことに対する感懐であり、飯能には希少な川越との交易の生きたあかしを見直すことだった。川越との縁も、この「かよい」も大切にしなければと思う。

それにしても飯能には川越とのつながりを裏打ちした資料が、まだまだかくれているはず。なかんずく木材を積出した原点の記録が出てこないのは不思議だと思う。それらが陽の目をみるとき、飯能と川越とのかかわりがもっと明らかになり、その絆が深まるにちがいない。

62年度の活動

「活性化」を合い言葉に、隔月例会がスタートしました。会員の皆様には、二ヵ月に一度のお便りを、どのように受け留めていただけたでしょうか。

年六回の例会は、郷土に目を向けるチャンスを与えてくれました。そこから今を見ていく目、歴史観が、参加者の心に芽生えてきたような気がします。

出席できなかった方々に、一年間のあゆみを報告します。

◉四月例会（4/25）

。享保の頃の小瀬戸

講師　野口正元氏

。刀匠　小林英道と刀の話

講師　岡野達雄氏

昨年行なった「二区めぐり」の総まとめとして、野口氏は、野口一族に焦点を合わせ、岡野氏は、普段見られない刀などを特別展示しながら話された。

◉六月総会（6/21）

。記念講演会

「河越氏とその館跡」

講師　小泉　功氏

六十一年度決算報告では、年会費（千円）の見直しが討議されたが、見送られた。しかし、活性化を図るには、会費の値上げもやむを得ないところにきている。

六十二年度事業計画では、年六回の定例会が承認され、活性化への幕開けの年となった。

記念講演は、小泉先生の豊富な体験談を交えて、河越氏の館跡が、スライドを通して再現され、味わい深いものであった。

また総会後の懇親会は、互いに親交を深め、歴史よもやまばなしに花を咲かせた夜であった。

◉八月例会（8/21）

。小江戸　川越歴史散歩

例会初の市外地見学会。会員外に参加者を募り（大型バス一台、四十五名）講師は、前述の小泉先生。総会後の講演会をそのままダブラせての現地学習会は、活性化ならではの企画である。（井上氏、吉田氏の随筆を参照）

◉十月例会（10/12）

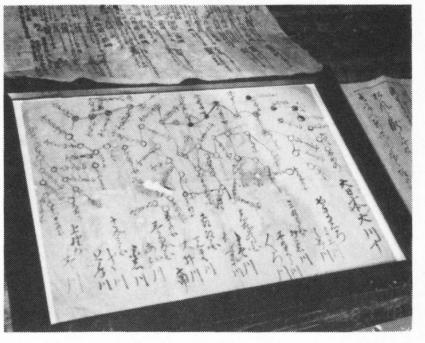
。第三回郷土歴史散歩

――　加治地区めぐり　――

西光寺の祭礼に合わせてこの日を選ぶ。加治地区理事、西野青木両氏、他、加治郷土史研究会の皆様が協力して、歴史散歩を盛り上げてくれた。（西野、浅見、岡野、坂口氏の稿を参照）

◉文化財展（11/3、11/4）

恒例の市教委、文化財保護審議委員による、秋の文化財展に郷土史研も合同参加。



◉十二月例会（12/7）及び第二回理事会

。石の民俗について

講師　小谷野寛一氏

石が信仰として生き続け、また芸術作品として石垣などに残されていることなど、スライドを交えてさまざまな角度から話された。

会の冒頭に、新井会長が辞意を表明され、理事会が開かれたが、後任の決定を見ず、六十三年度会費について話し合った。

◉二月例会（2/20）

「地場産業見学会…織物」

。見学場所、曽根織物、平岡レース、西村織物

（文化新聞に、大野邦弘氏、工場見学記が掲載）

なお、工場見学会は、「飯能の産業を知ろう」というテーマで、シリーズで行なう予定。

以上、活性化の一年でしたが、このことは、会員の皆様に出席できるチャンスを多くし、勉強したいテーマを探すきっかけになったことと思います。やがては〝好きなもの同志〟集まって、それぞれの研究グループができ上がるのではないでしょうか。

なお、この他、久留里の皆様をお迎えして（12/8）能仁寺で、交歓会がありました。萩野映明氏、森田社会教育課長も出席なされ、地域に根づいた活動も行なわれました。

昭和六十三年度

行事予定

◎四月　例会（古道を旅する）

◎五月　総会、並びに記念講演会。講師　谷　有二氏

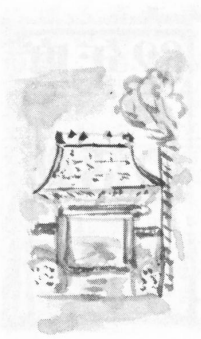
◎八月　例会（古道を歩く）

◎十月　歴史散歩（南高麗地区）

◎十二月例会（歴史散歩の事後学習会）

◎二月　地場産業見学会

以上、本年度は、古道と南高麗地区にスポットをあて、勉強会を開いていく予定です。関係資料等お持ちの方は、事務局までご一報下さい。また、十月歴史散歩、南高麗地区めぐりに、ご意見、ご要望などありましたら、担当理事、内野氏（二一四四八九）までご連絡ください。



新入会員

（敬称　略）

中村源一（長沢一九五四）
清水照子（双柳五六―一八）
古島恒子（稲荷町一三―四）
中島政男（本町二〇―二一）
石田和子（坂石一二四）
椙山治子（原町二一七―四）
藤田満智子（本町一―二三）
多賀起代（東町一七）
小俣克枝（山手町二二―一一）
高橋千代子（双柳六〇四）
遠藤けい（東町一八―一七）
福永冴子（南町六―一一）
青木里子（大河原一二八）
石井芙美子（飯能一二八九）
石森博子（双柳一四九二―一三）
児島八重子（本町四―三）
大沢邦三（長沢一七三七）

ご入会の手続き

昭和六十三年度の会員を募集しています。会員には、定例会のご案内、機関紙「郷土はんのう」の配布、また郷土史研究会刊行の本は、会員価格の特典もあります。

申し込みは、事務局、またはお知り合いの会員まで。

事務局　飯能市双柳一―一
市役所教育委員会
社会教育課（仲島）
電話（二）二一一一

年会費が郵便局で振り込めます

本年度から、郵便局に振り込み口座を設けました。是非ご利用下さい。

口座番号
東京　7―68135
加入者名
飯能郷土史研究会

出版のお知らせ

飯能郷土史研究会

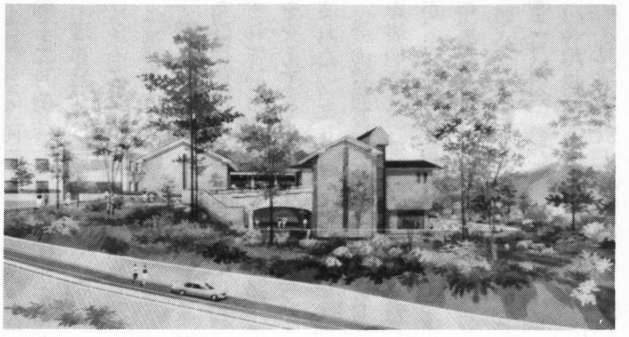
出版部門も活躍!!
売れています。

「飯能戦争」（新井清寿著）
定　価　八〇〇円
会員価格　七〇〇円

こんな郷土館になります

郷土はんのう第六号で、「郷土館に望む」という特集を組み会員の意見を募りましたが、その概要が決まりました。

一階…荷解室、整理室、特別収蔵庫、一般収蔵庫他。
二階…展示ホール、特別展示室、常設展示室、図書室研修室、休憩コーナー、研究室等。



鉄筋コンクリート二階建で、（延床面積一四九六、八㎡）周囲の景観や市民会館との調和を考え、切妻形屋根の落ち着いた形です。一階床は地表面から三、五m下げ、二階床は一、五m上げ、資料の搬入は東側から一階に下がるスロープを利用し、入館者は、市民会館側からのスロープを通り二階入口に入ります。

車椅子の方や、お年寄りにも使い易いように設計され、また二階西側には図書室など配置し市民の要望に答えたつもりです。

（社会教育課　仲島・談）

編集後記

二ヵ月に一度、例会の案内を出すうちに、いつしか名前だけは覚えて、多くの人と友達になってしまったような一年でした。そんな、ペンフレンドの君が、例会に顔を出した時、またまた私を〝最高の気分〟にさせてくれました。この一年は、会員と会員とが互いに細い糸で結ばれたような気がします。二ヵ月に一度の出会いがあったからでしょうか……。

また、たった一人の力が、いかに小さなものかを知った一年でもありました。これからは、好きなもの同志が集まって、（プロジェクトチームを組んで）研究していく時代のように思います。スライドやビデオ等の資料作りにも積極的に取り組んでいかねばならない時がきているようです。

（桑山）

題字　小谷野　寛一
表紙写真　井上　峰次

郷土はんのう　第八号
発行日　昭和63年5月28日
発行所　飯能郷土史研究会
飯能市双柳一―一
飯能市役所
教育委員会社会教育課内
印刷所　コバヤシ印刷